

本書は、臨床六十年との副題がある通り、著者が六十年の歳月を、漢方ひとすじに過ぎた歴史の濃縮を見る思いがする。正にそれは、表紙の黄金色が象徴しているようでもある。

新刊紹介と共に、異例ながら、著者六十年の業績に、感謝と祝意を表する次第である。

(山田 光胤)

〔医道の日本社 一九九〇年 七五六頁 定価八、五〇〇円〕

河瀬正晴著

『輸血の歴史——人類と血液のかかわり——』

本書の著者、河瀬正晴氏は姫路赤十字血液センターに製剤課長として勤務するかたわら、多くの著書を發表し、日本医史学会会員でもある篤学の士である。一九八九年には「AIDS、78〜88 切手で綴るエイズ年表」を發表し、時宜を得た出版として注目されたことは御存知の方も多いと思う。今回、同氏はその専門的知識を生かして『輸血の歴史——人類と血液のかかわり——』を出版したので御紹介したい。

本書は一言で言うならば、医学の歴史を人類と血液のかかわりという面から光を当てたハンディーな年表と言うことが出来よう。

著者は輸血の歴史を五つの時代に分けている。第一は「輸血学の先史時代」で人類が血液を神秘なもの、神聖なものと崇め、その

故に多くの非科学的な民間療法が行われた時代で十七世紀の初めまで続いた。やがてこの時代はハーヴィーの血液循環の発見にはじまる第二の時代、「輸血学の模索の時代」と続き、それ迄飲用されていた血液を血管へ「輸血」する方法が考え出され、動物の血液を含め多種の輸血が試みられるようになった。一方「瀉血療法」が広く行われ、瀉血により流された血液は戦争によって流された血液より多いと著者は書いている。次いでランドシュタインによる血液型の発見にはじまる第三の時代、「真の科学的輸血時代のあけぼの」がスタートし、輸血法は格段の進歩を遂げる様になった。又関連科学の発展に伴って抗凝固剤も開発され保存血液の輸血が可能となり、輸血副作用の本態の解明も進んで、ここに人類ははじめて輸血の恩恵を受けるようになった。一九三六年にはシカゴで世界最初の血液銀行が設立され第四の時代、「輸血学の発展と輸血検査法の確立の時代」に到達する。ここで著者はその専門知識を駆使して成分輸血、分画製剤更に輸血に関係した検査法の進歩を詳しく年表としてまとめている。輸血の重要性が益々認識される一方、輸血を介しての血清肝炎の流行は大きな社会問題となり、ここに売血の禁止、献血による血液の確保が時代の要請となった。年表は一九四九年、時の連合軍総司令部が安全な輸血対策を指示し、これに依えて一九五二年日赤中央病院内に血液銀行が開設されたことまで細かく記して当時の社会の動きを伝えている。最後に著者は現代を第五の時代、「輸血学反省の時代」と規定し、エイズをはじめとする新しい輸血感染症の発生は輸血の乱用に対する警鐘であると断じ、「二十一世紀に向けて正

しく有効な血液の使用法を確立する」時代であると結んでいる。

以上本書の概要を紹介したが、もう一つ特筆すべきは年表中に挿入された一八〇点に及ぶ医学切手についてである。著者は「医学切手友の会」（古川明会長）の会員として永年医学切手の収集に精進しているが、今回の著書にもそのコレクションの中から本文と関係の深い医学切手を選んで展示し文意を補っている。切手の中には輸血と直接関係はないが、医学の歴史から忘れてはならない人物、事項の切手なども含まれ、これが又この年表に医学史的な重みを加えているように思われる。

最後に欲を言えば、巻末に記載の参考文献と年表の記載との関連についてであるが、年表の宿命として詳細な記述は不可能である。だからこそ読者は簡潔な記載からより詳しい知識を望む時、参考文献の明示が是非欲しいと思われるのではなからうか。それともう一つ気付いた事、第二次大戦さ中、血漿の製造と保存に大きな貢献をなした米国の黒人外科医ドルー（Charles Richard Drew）の記載が無いのは何故であろう。彼の切手は一九八一年 Great Americans Series の一枚として発行されている。

とに角本書は医学切手収集家にとっては待望の書であると共に、医学の歴史に興味を持つ一般の人にも是非御一読をお薦めする次第である。

（小林 佑吉）

〔北欧社 一九九〇年 B五判 九〇頁 定価八、二四〇円〕

鈴木鑑著

『免疫学・血清学の歩んできた道』（第三版）

この道こそ鈴木鑑博士が自ら歩んで来られた道で、わが国で初めて創設せられた血清学教室（東大・三田定則教室）——緒方富雄教授の伝統の中に育ち、大成されたいわば血清学に土着された得難い専門家であり、永年の精進に多くの研究実績を積まれた斯道の重鎮である。先師緒方富雄教授のユニークな著述『血清学の領域から』、血清学講本、理論血清学などにも協力してこられ、血清免疫学談話会（三田定則会長）にも連なつて血清免疫学の歴史を推進して、戦後も Immuno-Advance の綜説を連載されたものに加筆された年表風に簡潔な血清学の歴史を述べられたのが本書の骨格である。

現在東大名誉教授として、また帝京大学教授として教鞭を執られ、直接講義を聞く学生や大学院生達は真に幸運であり、本書を座右に備え得る一般開業医家には特に進歩が急速で分子生物学が飛躍して理解し難い免疫学の吸収消化のために本書は有力な協力者であろう。内容はわかり易く整然と飾り気のない正確簡明な外、親切に主要原著論文の紹介が精密でその価値は極めて高い。正しく歴史を踏んで大極を掴み、かたよらず真理を理解し、先人の心にも触れ得ることは読んで快よく、楽しさが湧いて、嬉しい本である。特にX章は最近の新鮮な免疫学を平明に記述せられて著者の温かい心が伝わって来る。